

## 河南省水泉石窟の研究

胡皓然

太和十七年（493年）、北魏の首都は平城（中国山西省大同市）から洛陽（河南省洛陽市）に移された。遷都により仏教造像活動の中心は、洛陽へ移ることとなった。孝文帝を継いだ宣武帝は仏教を信奉し、北魏仏教は隆盛を極めることとなる。洛陽では龍門石窟以外、その周辺地域でも数多くの小規模な石窟が多数造営された。このことから仏教が、都の一部上層階級の官僚貴族だけでなく、地方の民衆にも浸透し始めていたことが窺われる。

これまで、北魏時代後期の仏教美術については龍門石窟を中心に行われてきたが、近年その周辺の小型石窟についても対象とした研究が行われるようになってきた。そしてそれらと龍門石窟との比較から、龍門石窟から受けた影響を解明することに重点が置かれてきた。しかし、石窟それぞれの独自性は殆ど注目されていない。地方で展開された小型石窟の考察から、その地方の地域性だけでなく、民衆の求めた仏教造像のあり方を明らかにしなくてはならない。そこで本報告では、小型石窟の中で、比較的規模の大きい「水泉石窟」を取り上げ、同石窟内の各壁面の造像形式の展開とそこから窺われる仏教造像の地方性や、この石窟に現れた民衆の願いがどのようなものであったかについて考察する。

水泉石窟は、比丘曇覆によって、510年代後半に造営が開始した。何度かに亘って造営が行われたが、これまで窟内部の龕や像の詳しい編年が行われていなかった。そこで、この窟内の造営過程を明らかにする作業から始めることにする。また個々の仏龕を見ると、それらは必ずしも龍門石窟からの影響だけでは説明できない形式を備えている。水泉石窟は開窟当初、龍門石窟の強い影響下にあったが、徐々にその影響が薄れ、水泉石窟にしか見られない独自の形式が現れたことを明らかにする。そして大型石窟からの様式受容とその後の展開を示し、小規模石窟の一つである水泉石窟の評価を行うことを本報告の目的とする。